

2022 AC

1st. Celebrate Sukkot

原語で味わう創世記第1章

集中特別講座 10/9~16

12日(夜) No.7

「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】

①ヨハネの福音書5章39節

あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。

その聖書は、わたしについて証ししているものです。

【新改訳2017】

②イザヤ書 46章10節

わたしは後のことを初めから告げ、まだなされていないことを昔から告げ、『わたしの計画は成就し、わたしの望むことをすべて成し遂げる』と言う。

※聖書のシナリオライターは時間と空間に支配されない永遠の神です。シナリオが歴史の中に突入する時、その初めと終わりが規定されることは当然のことです。

「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】

③イザヤ書34章16節

【主】の書物を調べて読め。
これらのもののうち、どれも失われていない。
それぞれ自分の伴侶を欠くものはない。
それは、主の口がこれを命じ、
主の御霊がこれらを集めたからである。

※「自分の伴侶」にたとえられているのは、神のみことばの証言が必ず伴侶のように置かれているということの意味します。例えば、「千年」「十四万四千人」など。

「創世記第一章」を学ぶ上で大切な視点

●創世記1章に関する注解書は多く書かれていますが、その多くが宇宙(地球)の始まりと考えています。しかしアシュレークラスでは、創世記1章を「**神の永遠のご計画の全貌が啓示されている章**」という視点で学んで行きます。

【新改訳2017】ヘブル人への手紙 4章12節

神のことは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、**たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。**

●私たちが持っている「理解の型紙」(この世の知恵、常識、教理)という眼鏡を外して、霊を働かせることが不可欠です(Ⅱコリ5:16, 3:6)。私たちの霊の目が開かれるように「シエーム・イエシュア」と呼びつつ、学んで行きたいと思います。

1. 11節のテキスト 「地の植物」 ①

● 「乾いた所」 = 「その地」 (「ハーアーレツ」 אֶרֶץ) の上に 「芽生えさせる」 植物は 「種のできる草」と 「種の入った実を結ぶ果樹」 の二つです。まだ太陽も造られていないのに、また受粉させる蝶や昆虫なども造られていないのに、地に植物を芽生えさせるというのは単なる生物学の話ではないことが分かります。「乾いた所」がイスラエルの民と緊密な関係があったように、ここでの植物もこれまでと同様にたとえなのです。

【新改訳2017】 創世記1章11節
神は仰せられた。

「地は植物を、種のできる草や、種の入った実を結ぶ果樹を、種類ごとに地の上に芽生えさせよ。」すると、そのようになった。

1. 11節のテキスト 「地の植物」 ②

エローヒーム ヴァヨーム

וַיֹּאמֶר אֱלֹהִים

神は 言われた

ゼラ マズリーア エーセヴ デシエ ハーアーレツ タドウシエー

תִּדְשֵׂא הָאָרֶץ דְּשֵׂא עֵשֶׂב מִזְרִיעַ זֶרַע

種の 生じる 草を 植物を その地は 芽生えさせよ(指示形)
ザルオーヴォー アシエル レミーノー ペリー オーセ ペリー エーツ

עֵץ פְּרִי עֹשֶׂה פְּרִי לְמִינֵוֹ אֲשֶׁר זֶרְעוֹבוֹ

その中にその種が その種類に従って 実を 結ぶ 果樹を
ヴァイエヒー・ヘーン アル・ハーアーレツ

עַל־הָאָרֶץ וַיְהִי־כֵן׃

そのように なった その地の 上に

※赤字は動詞。緑字は分詞。あとはすべて名詞と前置詞、および副詞です。

1. 11節のテキスト 「地の植物」 ③

● 11節には地に関する多くの新しい語彙が登場します。

- (1) 「芽生える」 (動詞「ダーシャー」 הַשָּׂדֶה の使役形)
- (2) 「植物」 (名詞「デシエ」 אֲשֵׁרָה)
- (3) 「草」 (名詞「エーセヴ」 עֵשֶׂב)
- (4) 「生じる」 (動詞「ザーラ」 לָרַחַץ の分詞「マズリーア」 מִזְרִיעַ)
- (5) 「種」 (名詞「ゼラ」 זֶרַע)
- (6) 「果樹」 (名詞「エーツ・ペリー」 עֵץ פְּרִי)
- (7) 「実を結ぶ」 (「オーセ・ペリー」 פְּרִי עֹשֶׂה)、 「結ぶ」 は分詞
- (8) 「その種類に従って」 (「レミーノー」 לְמִינוֹ)、 「種類」 は「ミーン」 מִין)
- (9) 「そのようになった」 (「イエヒー・ヘーン」 יְהִי כֵן)

1. 11節のテキスト 「地の植物」 ④

【新改訳2017】創世記1章11節

神は仰せられた。「地は植物を、種のできる草や、種の入った実を結ぶ果樹を、種類ごとに地の上に芽生えさせよ。」すると、そのようになった。

●この11節で最も大切な語彙は何だと思えますか。何のために地は「植物」を芽生えさせなければならないのでしょうか。注目点は「種」(「ゼラ」זֶרַע)の存在です。「種」のできる草、「種」の入った果樹の存在です。神は人が食べるものと、人以外が食べるものとを区別されています。

【新改訳2017】創世記1章29～30節

29 神は仰せられた。「見よ。わたしは、地の全面にある、種のできるすべての草と、種の入った実のあるすべての木を、今あなたがたに与える。あなたがたにとってそれは食物となる。

30 また、生きるいのちのある、地のすべての獣、空のすべての鳥、地の上を這うすべてのもののために、すべての緑の草を食物として与える。」すると、そのようになった。

2. 「種」(「ゼラ」 זֶרַע) ①

● 「地」の「乾いた所」を歩いた者たちとは「イスラエルの民」たちです。その者たちが何を食べて生きるのかと言え、神の「種」である「神のことば」です。それを食べて生きるために、種のできる草や種の入った実を結ぶ果樹を、神は地に生えさせようとしているのです。

● 「種」(「ゼラ」 זֶרַע)は男性形単数です。それに対して「地」は女性形です。実を結ぶためには「種」が不可欠です。「種」は男性しか持っていません。イスラエルも教会も女性形です。女性だけでは子(子孫)を産み出すことができません。子を産むためには種が不可欠です。その「種」とは神・人であるイエシュアご自身のことばです。マタイ13章に「種を蒔く人」のたとえ話があります。種が良い地に落ちることで、百倍、六十倍、三十倍の実を結ぶという話です。このたとえ話は、伴侶のように創世記1章11節とつながっているのです。

2. 「種」(「ゼラ」 זֶרַע) ②

● イエシュアが来られた目的は、本来多くの実を結んでいなければならなかったイスラエルの民が、神の期待を裏切って、実を結んでいなかったためです。何故実を結ばなかったのでしょうか。

【新改訳2017】 マタイの福音書13章13～15節

13 わたしが彼らにたとえで話すのは、彼らが見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、悟ることもしないからです。

14 こうしてイザヤの告げた預言が、彼らにおいて実現したのです。

『あなたがたは聞くには聞くが、決して悟ることはない。

見るには見るが、決して知ることはない。

15 この民の心は鈍くなり、耳は遠くなり、目は閉じているからである。

彼らがその目で見ること、耳で聞くことも、心で悟ることも、

立ち返ることもないように。そして、わたしが癒やすこともないように。』

● 13～15節に繰り返されている語彙があります。分かりますか。

3. 「悟る」(「ビーン」 בִּינָה) ①

【新改訳2017】 マタイの福音書13章13～16節

- 13 わたしが彼らにたとえて話すのは、彼らが見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず **悟る** こともしないからです。
- 14 こうしてイザヤの告げた預言が、彼らにおいて実現したのです。
『あなたがたは聞くには聞くが、決して **悟る** ことはない。
見るには見るが、決して知ることはない。』
- 15 この民の心は鈍くなり、耳は遠くなり、目は閉じているからである。
彼らがその目で見ること、耳で聞くことも、心で **悟る** ことも、立ち返ることもない
ように。そして、わたしが癒やすこともないように。』
- 16 しかし、あなたがたの目は見ているから幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているから幸いです。

●13～15節に繰り返されているのは「**悟る**」という語彙です。「悟る」とは、「霊で聞く」とことと密接な関係があります。神のことばを霊の中で聞くときに、それを悟ることができるのです。そして多くの実を实らせることができるのです。

3. 「悟る」(「ビーン」 𐤁𐤍) ②

● 「悟る」(「ビーン」 𐤁𐤍)ことは「理解する、聞き分ける」ことを意味します。これは神を理解するために必要なことです。そのことで、神と人とのかかわりがより親しいものとなるからです。神はそのことを確かめるために、たとえば語られたのでした。話を分かりやすくするためではありません。

【新改訳2017】詩篇119篇95節
悪者どもは私を滅ぼそうと狙っています。しかし私はあなたのさとしを聞き分けます(𐤁𐤍)。

●ここでの「ビーン」は、神のことばの背後にある隠された意味、深いみむねを見出そうとすることです。

【新改訳2017】詩篇5篇1節
私のことばに耳を傾けてください。【主】よ。私のうめきを聞き取ってください(𐤁𐤍)。

●ここでの「ビーン」は人の心の奥にあるうめきを聞き取ること、理解することを意味しています。いずれの場合にも、表面的なことばの背後にある真意を理解すること、聞き取ること、悟ることの重要性を示しています。

3. 「悟る」(「ブーン」 בּוֹן) ③

●このことは決して容易なことではありませんが、「悟る」ことの祝福は大きいのです。それは以下のことばが指し示しています。

【新改訳2017】マタイの福音書 13章19, 23節

19 だれでも御国のことばを聞いて悟らないと、悪い者が来て、その人の心に蒔かれたものを奪います。道端に蒔かれたものとは、このような人のことです。

23 良い地に蒔かれたものとは、みことばを聞いて悟る人のことです。本当に実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結びます。

●神のことばである「種」は、本来は神の選びの民イスラエルに与えられるものでしたが、彼らにそれを悟る者がいなかったために、異邦人の人々がそれを悟るようになることと預言されていたのです。

【新改訳2017】ローマ人への手紙 15章21節

こう書かれているとおりです。「彼(キリスト)のことを告げられていなかった人々が見るようになり、聞いたことのなかった人々が悟るようになる。」

3. 「悟る」(「ブーン」 בּוֹן) ④

【新改訳2017】ルカの福音書24章44～49節

44 そしてイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたと一緒にいたころ、あなたがたに話したことはこうです。わたしについて、モーセの律法と預言者たちの書と詩篇に書いてあることは、すべて成就しなければなりません。」

45 それからイエスは、**聖書を悟らせる**ために彼らの心を開いて、(原文=知性を開いた。)

46～48 こう言われた。「……………」

49 見よ。わたしは、わたしの父が約束されたもの(=力としての聖霊)をあなたがたに送ります。……………」

●私たちが聖書を悟るために「聖霊」の助け(啓示の御霊)は不可欠です。聖霊は、「人の霊」に働きかけることで、神のみこころが何であるか、人の心(「ヌース」 νοῦς)に**悟りを与えてくださる**のです。そのためにイエシュアはよみがえり、「いのちを与える御霊」となって、私たちの霊の中に入る必要があったのです。やがて終わりの日に、神はイスラエルの残りの者にも「恵みと嘆願の霊」を注いで神に立ち返らせます(ゼカ12:10)。そのことによって彼らに**悟り**が与えられ、主が「これはわたしの民」と言われるのです。

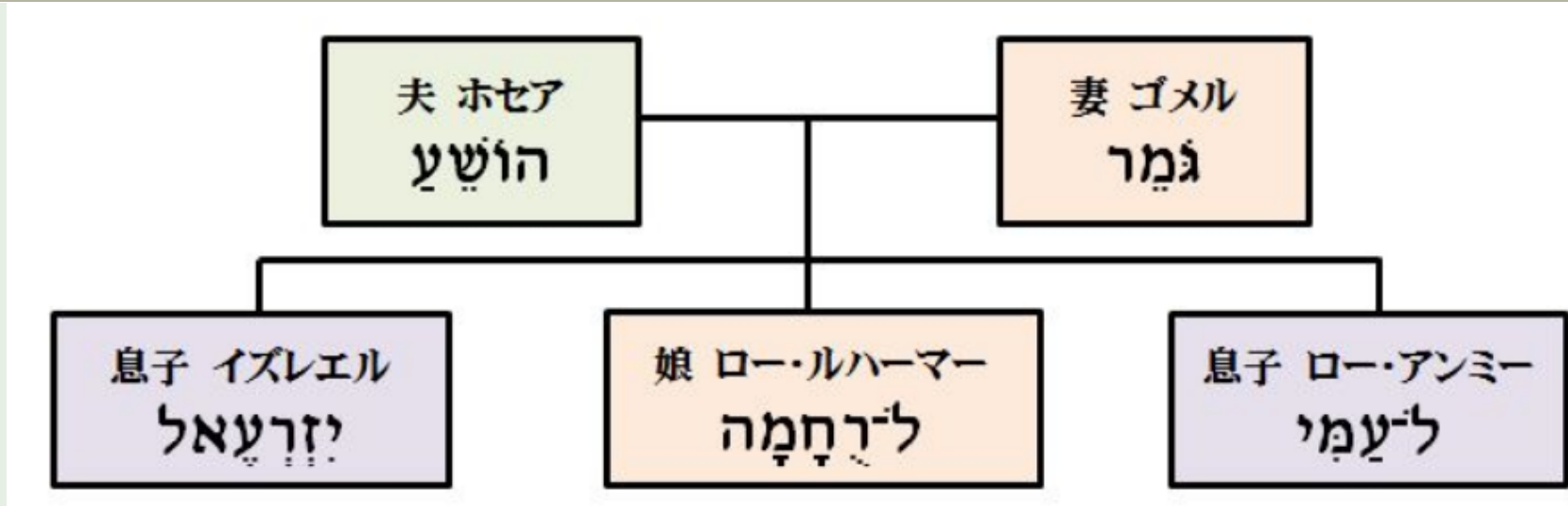
4. 終わりの日の「種」①

●北イスラエル王国の預言者に**ホセア**がいます。主はホセアに「行って、姦淫の女と姦淫の子らを引き取れ」と命じます。そこでホセアは行ってゴメルをめとるのです。夫の「ホセア」(יְהוֹשֻׁעַ)の語源は動詞「ヤーシャー」(יָשַׁע)で「**主は救う**」という意味であり、ここにもイエシュアが隠されています。

●妻の「ゴメル」(גֹּמֵל)の語源は動詞「ガーマル」(גָּמַל)で、「**断たれる**」という意味と「**成し遂げられる**」という意味の両義性をもった語彙です。なにゆえに両義性が成り立つのかと言えば、神のさばきと救いは表裏一体だからです。

●また彼らの子たち(息子たちと娘)の名前にも、神のご計画を啓示する意味が隠されています。

4. 終わりの日の「種」②



- 第一子の息子「イズレエル」(יִזְרְעֵאל)は後で説明します。
- 第二子の娘「ロー・ルハーマー」(לֹוּלְחָמָה)は「あわれまれぬ子」「愛されぬ者」という意味で、それは「わたしはもう二度とイスラエルの家をあわれむことはなく、決して彼らを赦さない」(6節)という意味。
- 第三子の息子「ロー・アンミー」(לֹוּעַמִּי)は「わたしの民ではない」という意味。いずれも「ロー」(לֹוּ)は強い否定を表わします。ただし原文では「ロー」(לֹוּ)が短縮されて「ロー」(לוּ)となっています。

4. 終わりの日の「種」③

●第一子の名前である「イスラエル」(אֱלֹהִים יִשְׂרָאֵל)という文字の中にאלがあり
ます。אלは「神」を意味します。つまり「イスラエル」とは「神が種を蒔く」
という意味になります。動詞の「ザーラ」(זָרָה)は「種を蒔く」という意味の
他に「散らされる」という意味と、「実を結ぶ」という意味を持っています。
前者の「散らされる」とはさばきとしての離散を意味し、後者の「実を結ぶ」
とは神のあわれみによって集められて回復することを意味しています。

●ホセア書1章4～5節の「イスラエル」は離散の意味で使われていますが、11
節の「イスラエル」は一つに集められるという回復の意味で使われています。つ
まり「両義性」を持つ語彙です。Hebrewにはこうした「両義性」を持つ語彙
があります(例:אָמַד「完成する、滅び失せる」)。

4. 終わりの日の「種」④

【新改訳2017】ホセア書1章11節

ユダの人々とイスラエルの人々は一つに集められ、一人のかしらを立ててその地から上って来る。まことに、**イズレエル**の日は大いなるものとなる。

●創世記1章11節において、神がなぜ地に「種のできる草や、種の入った実を結ぶ果樹」を芽生えさせる必要があるのでしょうか。それは、ホセアが姦淫の女ゴメルと結婚して彼らに子が生まれ、その名を「イズレエル」としたことから、その必然性を理解することができます。つまり、それは、創世記1章11節に、「乾いた所」を歩む神の民イスラエルに対する神の新しい創造、すなわち「ユダの人々とイスラエルの人々は一つに集められ、一人のかしらを立ててその地から上って来る」という大いなる神のご計画を啓示するためです。イスラエルの終わりのこと、つまり、彼らが「実を結ぶ民となる」ことが最初から預言されているのです。

4. 終わりの日の「種」⑤

【新改訳2017】 I ペテロの手紙 1章23~25節

23 あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく朽ちない種からであり、生きた、いつまでも残る、神のことばによるのです。

24 「人はみな草のよう。その栄えはみな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。

25 しかし、主のことばは永遠に立つ」とあるからです。

これが、あなたがたに福音として宣べ伝えられたことばです。

● 「朽ちない種」とは「神のことば」、すなわち「復活のキリスト」です。それは「いのちを与える御霊」でもあります。それは、受肉・十字架の死と復活という手順を経てもたらされた「新創造を発芽させるいのち」です。「いのちを与える御霊となられたキリスト」こそ「朽ちない種」の結実であり「福音」です。「福音」とは、私たちが朽ちることのない「御霊のからだ」となることでもあります。「からだ」を意味する「バーサール」(𐤁𐤄𐤀𐤃)の語源は「バーサル」(𐤁𐤄𐤀𐤃)で、「良きおとずれを宣べ伝える」という意味があります。

今回のまとめ

●今回も原文で読み解いていくことで、創世記1章は地球の創造の話ではなく、イスラエルを基軸としたイエシュアによる神の再創造の物語であることが理解できるのです。

●聖書の「種」とは、いのちをもった「神の種」「朽ちない種」「義の実を結ばせる種」であり、イエシュアの語った「神のみことば」を意味しています。その「種」であるイエシュアのことばを聞くことをせず、悟ろうとしなかったイスラエルの民は「散らされ」ます。しかし神のあわれみによって再び集められて「実を結ぶ」民となるというのが、神の永遠のご計画です。そのことが今回の創世記の箇所にも預言的に啓示されているのです。このように単なる植物が地に生え出るといって話ではなく、「種」であるイエシュアのことばが神の民イスラエルのうちに実を結ばせるという神のご計画の啓示なのです。